

ロシア語母語話者に対する無意味語アクセント調査

安藤 智子

1. 本稿の目的

アクセント体系の類型として、「自由アクセント言語／固定アクセント言語」という分類は広く用いられているが、実際にはアクセントを持つすべての言語がこの2種類のどちらかに問題なく分類されるというわけではなく、(1)のようにアクセントの自由度にもバリエーションがみられる。

(1) 完全な固定アクセント言語—フィンランド語等

固定アクセント的だが語種や語構成によっては差異のある言語—ドイツ語等
音節構造によってアクセントの位置が決まる言語—ラテン語等
完全な自由アクセント言語—日本語東京方言等

この中で「完全な自由アクセント言語」とした日本語東京方言においても、語構成によってアクセント核の位置が予測できる場合もあるし、比較的長い語においては音節構造からデフォルトのアクセントがかなりの程度予測できるとされる（窪蘭 (2006) 等）。このように、「完全な自由アクセント」に見える言語にも何らかの規則性が隠れている可能性がある。

ロシア語は、この分類で言えば「完全な自由アクセント言語」であり、特定の派生接辞を持つ語を除けばストレス位置は予測不可能である。スラヴ祖語から受け継がれた固有の語は1～2音節の短い形態素がほとんどであるが、それらがかつての声調を伴うアクセントの名残として個々にアクセントに関する特性を持っており、原則的にはそうした形態素の組み合わせによってストレス位置が決まるので、音素配列や音節構造からストレス位置を予測することができない。借用語には長いものもあるが、そのアクセントは原語と同じ場合もあれば異なる場合もあり、デフォルトのストレス位置というものについての日本語東京方言におけるような体系的な研究は筆者の知る限り進められていない。

そこで、本稿では、自由アクセント言語であるロシア語において、固有の語でない名詞のストレス位置に規則性あるいは傾向があるかどうか、あるとすればどのようなものかを明らかにすることを目的として調査を行い、その結果を分析する。

2. ロシア語の名詞アクセントについての先行研究と前提

2.1 固有語のストレス位置

スラヴ祖語から受け継がれた固有の形態素は、それぞれ次のうちいずれかの性質を持っていると考えられている (Garde (1976), Зализняк (1985) 等) : ①自己アクセント特性 (その形態素の内部の音節にストレスを置く) ②後ろアクセント特性 (その形態素の直後の音節にストレスを置く) ③前アクセント特性 (その形態素の直前の音節にストレスを置く) ④アクセント特性無し。このうち、名詞に必須の語根形態素は①・②・④のいずれか、屈折接尾辞は①・④のどちらかを持つ。また、派生接頭辞は①か④のどちらかを持ち、派生接尾辞はすべてを持ちうる。そして、①～③を持つものは強形態素、④を持つものは弱形態素と呼ばれる。このような特性を持つ形態素が線状に並んで名詞を形成するが、最も左に位置する強形態素のアクセント特性に従ってストレス位置が決められ、強形態素がない場合は語頭音節にストレスが置かれるというのが、固有語のストレス位置の基本的な原則である。¹

なお、複数の音節から成る語根形態素が①の自己アクセント特性を持つ場合、語根形態素の中のどの音節にストレスを置くかということが問題になることが考えられる。しかし、固有語の語根はそのほとんどが1音節であり、それが母音重挿によって2音節となっている語根は、自己アクセント特性を持つならば通常は第2音節にストレスを置く。それ以外で2音節から成る語根は少ないが、その場合も第2音節にストレスを置くものが多い。

屈折変化に目を向けてみると、原則に従い、語幹が①の自己アクセント特性を持つ語では屈折接尾辞の特性にかかわらず常に語幹にストレスが置かれ、語幹が②の後ろアクセント特性を持つ語では常に屈折語尾にストレスが置かれる。一方、語幹が④を持つ弱形態素から成る語では、屈折接尾辞が①を持つか④を持つかでストレス位置が変わる。つまり、①の場合は原則に従って屈折接尾辞にストレスが置かれることになるが、④の場合は語頭音節に置かれるのである。このような現象は移動アクセントと呼ばれる。

ただしこうした移動アクセントを生じる語は減っており、ストレスが固定して現れるようになるという変化が起こっている。また、語根が②または④を持つ多くの語において、単数形と複数形で異なる位置にストレスを置くという方向に変化しており、さらに、単数・複数それぞれの語形変化表の中でストレス位置を統一する方向への変化も見られる (Ando 2006)。したがって、現代ロシア語のストレス位置は単純化する一方で、必ずしも正確に各形態素の古来のアクセント特性から予測できるものでもなくなっていると言える。

2.2 借用語のストレス位置

借用語は、そのほとんどにおいて語幹に固定したストレスが見られる。中には屈折変化を通じて屈折接尾辞に固定したアクセントが見られるもの (例えば、тамад'-а /tamad-'a/ (単数主

格), тамад'-ы /tamad-'y/ (複数主格)「宴会の幹事」²⁾ や, 語幹末と屈折接尾辞の間で移動アクセントを呈するもの (例えば, соф-'а /sof-'a/ (単数主格), 'соф-ы /'sof-y/ (複数主格)「ソファ」) もあるが, 借用語としては特別な派生語尾を持つものを除くと生産的とは言えない。

借用語のストレスについてのСуперанская (1968) の研究では, 「語末の要素によってストレス位置に著しい偏りが見られる」ということが指摘されている。ここで「語末の要素」というのは, 派生接尾辞がそれに当たる場合もあるが, 特定の形態素として切り取ることでできない語末の音連鎖をも指している。というのは, たとえば, -ыз /uz/ という音で終わる借用語の多くが語幹末にストレスをもっていることが次の例からわかるが, これらの例において-ыз /uz/は何の意味も機能も共有しておらず, 原語も様々なのである。

(2) ар'буз /ar'buz/ 「西瓜」 <トルコ語

арке'буз /arke'buz/ 「火縄銃」 <イタリア語

кар'туз /kar'tuz/ 「男性用の帽子」 <オランダ語

кон'фуз /kon'fuz/ 「当惑」 <ラテン語

хун'хуз /xun'xuz/ 「匪賊」 <中国語

ただし, 'камбуз /'kambuz/ 「船の厨房」, на'кроуз /na'ktouz/ 「羅針儀箱」 <オランダ語)

Суперанская (1968: 58)

3. 調査の方法

3.1 調査の概要

本稿の目的 (第1節参照) を達成するために, 一つの方法として, 多くの借用語を集めてストレス位置を分析するという方法が考えられるが, その場合, インプットとして原語のアクセントをどのように考慮するかという問題がある。そもそもどの言語から借用されたのかが定かでない語もあるし, ストレスアクセント言語以外からの借用の場合, どこにストレスがあると認識されるかも明らかではない。したがって, 本稿ではまず, 無意味語で調査を行ってみることにする。その結果が既存の借用語にも当てはまるかどうかの調査は今後の課題としておきたい。

今回の調査は, ロシア連邦国立リャザン大学の協力を得て, 2008年9月5日に音声学の第1回目の講義に集まった英語コースの学生に被験者となってもらった。受講者は39名いたが, そのうち2名は母語がロシア語ではなく (ゲルジア語およびアルメニア語), 別の1名は事情により十分に回答できなかったので, 残る36名の回答を分析対象とする。

調査は, 3.2節で見る無意味語をランダムに並べたリスト (表14の順) を印刷し, ロシア語母語話者にストレス位置をマークしてもらおうという方法をとった。その際, 何か新しい商品

の名称としてロシア語のキャリア文 «Это называется _____.» (「これは～というものです。」)の中で発音するようにして、どこにストレスを置くか決めてもらうようにした。

また、被験者が語のストレス位置を正しく認識できているかどうかを確認するために、ストレス位置の聞き取りテストを行った。このテストは、上述のリストとは別の22の無意味語でストレス位置を実験者が指定したものを用意し、それをロシア語母語話者が読み上げたものを録音して被験者に聞かせ、その発音におけるストレス位置をマークしてもらうというものである。このストレス位置聞き取りテストで間違いの多い被験者のデータは用いない予定であったが、分析対象とした36名のうち4名は22語中1語のストレス位置を誤ったものの、2語以上のストレス位置を誤った被験者はいなかったため、分析対象とした被験者のストレス位置の認識に問題はないものと考えられる。

3.2 調査語について

調査に用いる無意味語には、ロシア語に存在する形態素を連想させる語や、複合語・派生語のような形態素の境界を感じさせる語、あるいは特定の外国語からの借用を思わせるような語ではなく、語幹が単一の形態素から成る名詞と感じられそうな語形態をロシア語母語話者の協力を得て用意した。その際、次の点に留意した。

(3) 調査語選定の際の留意点

- A. 語の長さ：語幹が複数音節から成っていてストレス位置のバリエーションがあり、かつ単純語として不自然でない長さとして、3音節を中心とし、2～4音節の無意味語を作成する。
- B. 文字ш, ыとьの付いた子音字：これらの文字はロシア語固有の語（または限られた外国語からの借用語）に多く表れる音を表す文字であり、新しい語彙にそのような音があることは不自然さを感じさせる可能性があるため、用いない。
- C. 文字əは固有語ではきわめて限られた場合にしか表れず借用語であることを感じさせ、文字eは借用語かどうかでその前の子音の発音が変わりうるため用いない。
- D. ストレスがあることを示す文字èは用いない。

このようにして、新語としてもおかしくはなく、ロシア語にあっても不自然でない、意味や他の言語からの借用を全く感じさせない無意味語をめぐって調査語を作成した。

こうして作成された調査語のリストは(4)のとおりである。リストの左には音節数に加えて、それぞれの音節が軽音節(軽)か重音節(重)かが示してある。「軽」または「重」の後に「o」とあるのは、その音節を構成する母音字がoであることを示す。「+」はその後の音節が子音

で始まることを示し、「-」は母音で始まることを示す。また、軽の文字は、その軽音節の頭子音が3子音の連続であることを示している。

- (4) a. 2音節 (軽+重) пурам гисан катис мукиг
 b. 3音節 (軽+軽+軽) пурама гисана катиса мукига
 c. 2音節 (重+重) пуйрам гилсан кантис муркиг
 d. 3音節 (重+軽+軽) пуйрама гилсана кантиса муркига
 e. 3音節 (軽+重+軽) пурайма гисанда катилса мукирга
 f. 3音節 (軽o+軽+軽) порама госана котиса мокига
 g. 3音節 (軽+軽o+軽) пурома гисона катоса мукога
 h. 3音節 (軽+軽+軽o) пурамо гисано катисо мукиго
 i. 3音節 (軽+軽+軽) тустрама
 j. 3音節 (軽o+軽+軽) тострама
 k. 3音節 (重+軽+軽) туйстрама
 l. 3音節 (軽+軽+軽) струпума
 m. 3音節 (軽+軽o+軽) струпома
 n. 3音節 (軽+重+軽) струпуйма
 o. 3音節 (軽o+重+軽) госанда
 p. 3音節 (重+軽o+軽) галсода
 q. 3音節 (軽+軽+重) пурамил гисанип катисун
 r. 4音節 (軽+軽+軽+軽) пурамила гисанита катисуна
 s. 4音節 (軽-軽+軽+軽) пуирама паурама паирума
 t. 4音節 (軽+軽-軽+軽) паруйма парауми парайми

また、これに加えて、あえて比較のために、ストレス位置の決定にかかわる可能性の高い語末要素を持った無意味語も用意した。これらの語末要素を持つ語は借用語についての Суперанская (1968) の統計において語末音節にストレスを持つ割合が高いものであり (詳細は 4.5節参照)、これらの無意味語がこのとおりの傾向を見せるか否かを確認する。そのリストを (5) に挙げる。なお、(5) の無意味語の音節構造はすべて (軽+軽+重) である。

- (5) u. 語末要素 -уз /uz/: пурамуз гисануз катисуз
 v. 語末要素 -аж /až/: пурамаж гисанаж катисаж микараж
 w. 語末要素 -ит /it/: пурамит гисанит катисит микарит

3.3 調査項目とその目的

ここでは、前節で挙げた調査語を分析する観点とその分析の目的について述べる。分析の観点は、次の5つの要素がストレス位置に影響を及ぼす条件としてあてはまるかどうかという点である：1) 形態素境界からの距離、2) 音節の重さ、3) 母音の種類、4) 頭子音の数、5) 既存語においてストレス位置に偏りを見せる語末要素。

まず、1) 形態素境界からの距離と関連して語境界（語頭あるいは語末）からアクセント音節までの距離は、第1節で述べたようにラテン語などの言語においてはもちろん、日本語東京方言や英語のようないわゆる自由アクセント言語においても語種や品詞によってアクセント位置の決定に関与していることが論じられている。このうちラテン語や日本語東京方言などは語末から数えるタイプである。ロシア語の場合は第一ストレスのほか第二ストレスが置かれる場合に第一ストレスのほうが語末に近い位置に置かれることから、まずは4.1節で語末から何音節目にストレスが置かれることが多いかを見てみることにする。ただし、ロシア語のアクセントパターンにおいてより生産的なのは語幹にストレスを置くタイプであるが、母音で終わる名詞の主格形では語末の母音が屈折語尾とみなされる場合が多いため、語末の母音を除いて何音節目にストレスが置かれるか、すなわち語幹末と考えられるところから何音節目かも数えてみなければならない。

次に、2) の音節の重さも、1) の場合と同様に、多くの言語においてアクセント位置の決定に関与している。ロシア語においては、母音は長さの対立がなく二重母音もないし、英語などに比べれば開音節が多いが、あらゆる子音で終わる語末音節は閉音節となるし、語中でも共鳴子音が末尾子音となる閉音節は存在するので、これらの閉音節を重音節とみなし、すべての開音節を軽音節とみなすことにする。そして、この音節の軽重がアクセント位置に関与しているかどうかを4.2節で調べることにする。

次に3) の母音の種類については、4.3節で二つの視点から分析を行う。まず、さまざまな言語において、狭い母音を持つ音節よりも広い母音を持つ音節の方がアクセントを担いやすいという傾向が観察されている。そのような傾向がロシア語にもあるかどうかというのが一つ目の視点である。

二つ目は、ロシア語独自の事情によるもので、母音字 *o* の影響である。標準ロシア語において、この文字は i) ストレス音節にあるか、ii) それ以外の音節にあるかで発音が異なる。i) の場合は円唇後舌の中広母音として発音されるが、ii) のそれ以外の場合は非円唇で母音字 *a* と同じ発音になるのが原則である。しかし、一部の借用語ではストレス音節以外でも *o* と書いて円唇後舌の中広母音として発音する場合がある。このため、未知の語である無意味語においては母音字 *o* を円唇後舌の中広母音として発音する可能性が高く、そのことが、母音字 *o* を持つ音節にストレスを誘引するという可能性があるのではないかと考える。この仮説についても分

析したい。

次に4)の頭子音の数についても、4.4節で二つの観点から分析を行う。まず一つ目に、頭子音がある場合、その数がストレス位置に関与するかどうかという点である。頭子音の数や種類がストレス位置に関与しているという事例は特に知られていないが、同様の子音なら1つよりも複数ある方が発音に多くのエネルギーと時間を必要とすることは明らかであり、重い音節や広い母音がストレスを誘引する音声学的原因にもそのようなことがあるならば、頭子音の数が多の場合にストレスを持ちやすいということがあっても不思議ではない。この分析のために、調査語の中に頭子音が1つの音節と3つの音節を組み込んだ。2子音で始まる音節もロシア語には多いが、今回は違いを大きくして傾向の有無のみを調べてみたい。

二つ目の視点は、頭子音の有無によってストレス位置に影響があるかどうかである。開音節の後に頭子音を持たない音節が来ると、母音連続が生じる。前述のとおりロシア語は二重母音を持たないので、母音連続は二重母音にはなりえず、あくまでも別々の音節に属する2つの母音である。ロシア語では形態素中の母音連続は一般的でなく、母音連続があればその間に形態素境界があるか、あるいはその語が借用語であるかのどちらかである。既存の形態素や形態素境界を連想させないように配慮して作られ、原語の意識も持たせないように作られた無意味語の場合はどうなるかを調べるために分析を行う。

最後に、5)の既存語においてストレス位置に偏りを見せる語末要素は、3.2節の(5)の調査語の分析によってその影響が調べられる。ここで言う「語末要素」とは、2.2節で見た借用語の語末の要素と同様に、それだけで接辞を成すか形態素の一部であるかにかかわらず、語末(より正確には語幹末)に位置する音連鎖を指す。詳細は4.5節で述べるが、もし既存語における語末要素によるストレス位置の偏りが無意味語にも反映されるとしたら、すべての調査語について同じ語末要素を持つ既存語のストレス位置の偏りを調べて比較する必要がある。ここではその必要があるかどうかを確認すると同時に、語末要素の影響がどのような範囲で有効なのかを調べることを目的とする。

4. 調査結果

4.1 形態素境界からの距離

まず、調査に用いた無意味語の音節数別に、語末から何音節目にストレスを置くという回答が何%あったかを表1に示す。以下の表において語末からの音節の位置はI～IVの数字によって示す(つまり語末音節がI、次末音節がII、前次末音節がIII、4音節語の語頭音節がIVとなる)。なお、ストレス位置の決定に迷った場合は複数の音節をマークしてよいこととしたため、有効回答数(被験者数36-無回答の数)に対するその音節を選んだ回答の数の割合を計算しており、合計は100%とは限らない(以下同様)。

表 1 : 音節数と語末からのストレスの位置

(括弧内は調査語数)

	I	II	III	IV
2音節語 (8語)	69.44%	31.25%		
3音節語 (46語)	28.55%	67.09%	5.33%	
4音節語 (9語)	3.11%	90.70%	6.51%	1.55%

この表1から、全体として語末から2音節目が最も多く3音節目より前は少ないと言えるが、子音で終わる語と母音で終わる語に分けたとき、より明確な傾向を見ることができる。

表 2 : 音節数と語末からのストレスの位置 (語末の子音/母音別)

語末		I	II	III	IV
子音	2音節語 (8語)	69.44%	31.25%		
	3音節語 (14語)	74.29%	20.93%	6.99%	
母音	3音節語 (32語)	8.54%	87.29%	4.61%	
	4音節語 (9語)	3.11%	90.70%	6.51%	1.55%

表2から、この調査の範囲では、子音で終わる無意味語は語末音節にストレスが置かれることが多く、母音で終わる無意味語は語末から2音節目(次末音節)にストレスが置かれることが圧倒的に多いということがわかる。これは、形態素境界を考慮すれば、母音で終わる主格形はその母音が屈折語尾になることが多いので、次のように言い換えることができる。

(6) 無意味語のストレスは語幹末に置かれることが多い。

ひとまずこれをデフォルトのストレス位置を示すものとの仮説を立て、以下の分析に取り組んでいきたい。このデータに含まれる調査語には、特定の語末要素を持ったものや重音節などストレスを誘引する可能性のある要素を持ったものも含まれているため、それらが何らかの影響を及ぼしているかどうかについて、詳細に見ていかなければならない。

4.2 音節の重さ

次に、音節の重さがストレス位置に与える影響について見ていく。子音で終わる語は必然的に語末音節が重音節であり、母音で終わる語は語末音節が軽音節である。調査語の中ですべての組み合わせが試されているわけではないが、表3では、調査語の音節の軽・重を前から順に示した。子音で終わる2音節無意味語(軽・重と重・重)と母音で終わる3音節無意味語(軽・軽・軽と軽・重・軽と重・軽・軽)のそれぞれの中で比較したとき、音節が重いことによってストレスを持つ割合が高くなる可能性が考えられる位置の数値に下線を付した。

表3：音節の重さとストレス位置の関係

語末	各音節の重さ	I	II	III	IV
子音	軽・重 (4語)	74.30%	27.08%		
	重・重 (4語)	64.58%	<u>35.42%</u>		
	軽・軽・重 (14語)	74.29%	20.93%	6.99%	
母音	軽・軽・軽 (20語)	9.05%	86.08%	5.42%	
	軽・重・軽 (6語)	8.41%	<u>89.71%</u>	2.34%	
	重・軽・軽 (6語)	6.94%	88.89%	<u>4.17%</u>	
	軽・軽・軽・軽 (9語)	3.11%	90.70%	6.51%	1.55%

子音で終わる2音節の語を見ると、語末から2音節目が重い場合の方が軽い場合に比べてストレスを持つ可能性が増すようではあるが、調査語が少ないので確実なことは言えないであろう。母音で終わる3音節の語を見比べても、音節の重さによって大きな違いはないようである。語が子音で終わるか母音で終わるかを問わずにデータを見れば、(6)の代わりに「語末音節が重ければ語末音節に、軽ければ次末音節にストレスが置かれやすい。」という一般化ができそうにも思えるが、これはロシア語名詞の形態を考えると正しい一般化とは言えないであろう。なぜなら、単数主格形が子音で終わっている名詞は単数主格を示す屈折語尾がゼロ形態素であり、母音で終わっている名詞は、一部の借用語を除けばその最後の母音が単数主格形の屈折語尾なのであり、そのどちらのタイプの名詞も屈折変化表を見渡せば、屈折語尾の子音で終わる場合もあれば屈折語尾の母音で終わる場合もあるし、ゼロ語尾のために語幹の子音で終わる場合もあるのである。固有語では2.1節で述べたように屈折語尾によってストレスが移動する場合もあるがそれは屈折語尾が子音で終わるか母音で終わるか（つまり、語末が重音節であるか軽音節であるか）で決まっているのではないし、そのような移動アクセントのタイプは非生産的である。より生産的な、ストレスが屈折語尾によらず固定しているタイプの語の場合、語末が重音節であっても軽音節であってもストレスの位置に影響はないということである。

したがって、この調査から見る限り、音節の重さはストレス位置に関与しないと考えられる。

4.3 母音の種類

この調査で用いた母音は狭母音 /i, u/, 広母音 /a/, それに3.3節で述べた母音字 o の影響を調べるための /o/ である。ここでは、開口度の影響を調べるために狭母音と広母音を比較し、さらに母音で終わる3音節語において /o/ もこれらと比較する。

まず、狭母音と広母音とを比較する。子音で終わる無意味語は表4のとおりであった。ここでは、広母音を持つ音節にストレスが置かれた割合に下線を付している。

表4：子音で終わる調査語の各音節の母音の広さによるストレスの割合

各音節の母音	I	II	III
狭・狭（2語）	50.00%	51.39%	
狭・広（4語）	<u>97.92%</u>	2.09%	
広・狭（2語）	31.94%	<u>69.45%</u>	
2音節語全体	69.44%	31.25%	
広・狭・狭（3語）	72.09%	19.52%	<u>9.31%</u>
狭・広・狭（7語）	71.00%	<u>26.24%</u>	5.57%
広・狭・広（1語）	<u>75.00%</u>	13.89%	<u>13.89%</u>
狭・広・広（3語）	<u>83.94%</u>	<u>12.30%</u>	5.66%
3音節語全体	74.29%	20.93%	6.99%

表5：子音で終わる調査語の母音の広さによる各位置のストレスの割合（括弧内は調査語数）

		I	II	III
2音節語	広母音	97.92% (4)	69.45% (2)	
	狭母音	40.97% (4)	35.49% (6)	
	2音節語全体	69.44%	31.25%	
3音節語	広母音	81.71% (4)	22.06% (10)	10.46% (4)
	狭母音	71.33% (10)	18.12% (4)	5.60% (10)
	3音節語全体	74.29%	20.93%	6.99%

表4を見ると、2音節語においては広母音を持つ音節がストレスを持つ割合が高くなっている。3音節語においては、広母音が二つ含まれる語の場合にはばらつきがあるものの、同じ位置では狭母音より広母音の方がストレスを持つ割合が高いところが多い。

さらにI～IIIのそれぞれの位置において広母音を持つ音節と狭母音を持つ音節がストレスを置かれた割合を表5に示す。ここでは括弧内の数字が該当する語数を示す。

表5を見ても、広母音を持つ音節の方が狭母音を持つ音節よりもストレスを置かれる割合が高いと言えるが、やはり3音節語の場合よりも2音節語の場合の方がその傾向が顕著である。

しかし、各分類に属する調査語数が少ないことと、語末要素による偏りとの関係から、この結果だけで広母音がストレスを惹きつけやすいと断言することはできないであろう。

次に、母音で終わる3音節無意味語について、狭母音と広母音、それに/o/を比較する。表6では、広母音を持つ音節がストレスを置かれた割合に下線を付し、母音字oを持つ音節がストレスを置かれた割合を斜体で示している。さらに表7にI～IIIの各位置において広母音・/o/・狭母音を持つ音節がストレスを置かれた割合を示す。

表 6：母音で終わる 3 音節調査語の各音節の母音の種類によるストレスの割合

各音節の母音	I	II	III
狭・狭・広 (5 語)	10.60%	85.49%	3.91%
狭・狭・o (1 語)	8.33%	80.56%	11.11%
狭・広・広 (8 語)	11.14%	86.07%	3.14%
狭・広・o (2 語)	5.56%	90.28%	4.17%
広・狭・広 (3 語)	8.33%	87.04%	4.63%
広・狭・o (1 語)	13.89%	80.56%	11.11%
広・o・広 (2 語)	0.00%	97.22%	4.17%
狭・o・広 (4 語)	6.95%	90.28%	2.78%
o・狭・広 (2 語)	6.95%	83.34%	9.73%
o・広・広 (4 語)	7.78%	88.04%	4.88%
3 音節語全体	8.54%	87.29%	4.61%

表 7：母音で終わる 3 音節調査語の母音の種類による各位置のストレスの割合

	I	II	III
広母音	8.57% (28)	87.23% (14)	5.56% (6)
母音字o	8.33% (4)	92.59% (6)	6.50% (6)
狭母音	(0)	84.70% (12)	3.76% (20)
3 音節語全体	8.54%	87.29%	4.61%

表 6 を見る限り、広母音を持つ音節あるいは母音字 o を持つ音節が 3 音節語全体と比べてそれぞれの位置で特に高い割合でストレスを持つということはないように見えるが、表 7 のようにまとめると、/o/ と広母音がストレスを持つ割合は狭母音のそれと比べて若干高くなっている。

次に、母音で終わる 4 音節無意味語で狭母音と広母音を比較する。これも子音で終わる調査語の場合と同様に表 8 と表 9 においてストレスが置かれた割合を比較すると、次末音節と前次末音節において広母音を持つ音節が狭母音を持つ音節よりもストレスを置かれる割合が若干高い。ただし、語末音節では、屈折語尾になる可能性の高い広母音 /a/ よりも屈折しない可能性の高い（つまり語幹末として認識される可能性が高い）狭母音 /i/ を持つ音節の方が割合が高くなっている。³

表 8 : 母音で終わる 4 音節調査語の各音節の母音の広さによるストレスの割合

各音節の母音	I	II	III	IV
狭・狭・広・広 (1)	0.00%	97.22%	2.78%	0.00%
狭・広・狭・広 (2)	4.25%	88.73%	7.07%	2.82%
広・狭・広・広 (1)	0.00%	97.22%	0.00%	2.78%
広・狭・狭・広 (3)	3.71%	92.59%	4.63%	0.93%
広・広・狭・狭 (2)	4.17%	83.34%	13.89%	1.39%
4 音節語全体	3.11%	90.70%	6.51%	1.55%

表 9 : 母音で終わる 4 音節調査語の母音の広さによる各位置のストレスの割合

	I	II	III	IV
広母音	2.80% (7)	97.22% (2)	10.48% (4)	1.39% (6)
狭母音	4.17% (2)	88.84% (7)	3.33% (5)	1.88% (3)
4 音節語全体	3.11%	90.70%	6.51%	1.55%

4.4 頭子音の影響

4.4.1 頭子音の数

ここでは、語幹の中で3つの頭子音を持つ音節が1つの頭子音を持つ音節と比べてストレスを持ちやすいか否かを比較する。

表10は、母音で終わる3音節語の語幹の第1音節と第2音節において頭子音が3つの音節が頭子音が1つの音節と比べてストレスを持つ割合が高くなるか否かを調べた結果である。

調査語数が少ないが、これを見る限り、頭子音の数がストレスの位置に影響を及ぼすことはなさそうである。

表10 : 語幹音節の頭子音の数によるストレスの割合

各音節の頭子音の数	I	II	III
1 - 3 - 1 (3語)	15.92%	81.27%	3.73%
3 - 1 - 1 (3語)	5.63%	90.63%	3.73%
母音で終わる3音節語全体	8.54%	87.29%	4.61%

4.4.2 頭子音の有無

次に、4音節無意味語の語幹の第2音節（前次末音節）あるいは第3音節（次末音節）が頭子音を持たない場合に、その音節あるいはその直前の音節にストレスが置かれた割合がどうなるかを見る。

表11では、次末音節に頭子音がない場合、前次末音節に頭子音がない場合、すべての音節に

頭子音がある場合の3つに分けて、4音節語のどこにストレスが置かれるかを示したものである。この中で、頭子音を持たない音節がストレスを置かれた割合に下線を付し、その直前の音節にストレスが置かれた割合に二重下線を付している。

この表から、頭子音を持たない音節がストレスを持ちやすいということはないようである。頭子音を持たない音節の直前の音節の母音は、頭子音を持たない音節の母音とともに母音連続をなすことになるが、こちらについては、前次末音節において他の場合より高い割合を示すものの、語頭音節ではむしろ若干低い値となっている。

表12では母音別の結果を表示しているが、これを見ても、母音の種類や母音連続の前項か後項かということで一般化はできないということがわかる。

表11：語幹音節の頭子音の有無によるストレスの割合

語幹音節の頭子音の有無	I	II	III	IV
次末音節頭子音なし（3語）	4.63%	<u>84.26%</u>	<u>12.04%</u>	1.85%
前次末音節頭子音なし（2語）	0.00%	97.22%	<u>1.39%</u>	<u>1.39%</u>
全音節頭子音あり（4語）	3.51%	92.28%	4.92%	1.41%
4音節語全体	3.11%	90.70%	6.51%	1.55%

表12：連続した母音を持つ音節にストレスが置かれた割合（母音別）

調査語	頭子音を持たない音節の位置	母音連続	/a/	/u/	/i/
параими	II	/ai/	<u>16.67%</u>		80.56%
парауми	II	/au/	<u>11.11%</u>	86.11%	
паруима	II	/ui/		<u>8.33%</u>	86.11%
паирума	III	/ai/	<u>0.00%</u>		0.00%
паурама	III	/au/	<u>2.78%</u>	0.00%	
пуирама	III	/ui/		<u>0.00%</u>	2.78%

4.5 語末要素の影響

ここでは調査項目の最後として、語末要素の影響の有無を見る。借用語においては2.2節で見たように、Суперанская (1968) が語末要素によってストレス位置に著しい偏りがあることを指摘している。彼女のデータにはこの主張を裏付ける語末要素が多く含まれているが、今回の調査では3つの語末要素を持つ調査語を用意した。

1つは、-аж /aʒ/を語末に持つものである。Суперанская (1968: 240)によればこれを持つ53語の借用語すべてが語末音節にストレスを持つ。さらに、これらの語の中にはゼロ語尾を持つ単数主格形以外の屈折変化形において屈折語尾にストレスを持つものがあり、それは比較的使用

頻度が高い語に多いようである。-аж /aʒ/を持つ語はその多くがフランス語からの借用語であるという共通点を持っている。借用語か固有語かを問わず掲載されているШевелева他編 (1974) において -аж /aʒ/ で終わる語は107語載っているが、これもすべて少なくとも単数主格形で語末音節にストレスを持つ。そこで、借用元の想定できない無意味語でも同様の結果になるのかどうかを調べたい。

2つ目に、-ит /it/ を語末に持つ借用語はСуперанская (1968: 52) によれば70語中68語 (97.14%) が語末音節、1語 (‘кредит’ 「貸方」) が次末音節にストレスを持ち、残る1語 (‘ал’фа’вит’ 「アルファベット」) は語末音節と次末音節との間でゆれを示す。ただし屈折変化形においてストレスの位置は語幹末から動かない。固有語を含めたШевелева他編 (1974) において -ит /it/ で終わる語は330語載っているが、そのうち326語 (98.79%) が語末音節にストレスを持ち、次末音節にストレスを持つ4語のうち ‘кредит’ 「貸方」以外は名詞ではない。この語末要素を持ち語末にストレスを持つ借用語は様々な原語からのものがあるが、鉱物名や医学用語で各種の炎症を示す語や人の属性を表す語が多く含まれており、この語末要素が多の場合に接尾辞として取り出せるものであることが分かる。そこで、鉱物名等だと分かっている場合に語末要素 -ит /it/ を持つ語が末尾にストレスを持つのか、それとも意味に関係なく類推が働くのかを無意味語で調査する。

3つ目に、-уз /uz/ で終わる語をСуперанская (1968: 240) は7つ挙げているが、うち4つが語末音節に、1つ (‘камбуз’ /kambuz/ 「船の厨房」) が次末音節にストレスを持ち、2つ (на’ктоуз /na’ktouz/ 「羅針儀箱」と ар’буз /ar’buz/ 「西瓜」) は語末音節と次末音節との間でゆれを見せるとしている。ゆれないもののみで57.14%、ゆれを見せるものを含めると85.71% が語末音節にストレスを持つことになる。一方、固有語を含めたШевелева他編 (1974) には -уз /uz/ で終わる語が36語載っているが、そのうち語末音節にストレスを持つのは25語 (69.44%)、次末音節が10語、前次末音節が1語である。語末音節にストレスを持つ割合は4.1節で見たこの調査の子音で終わる無意味語全体と比較しても高くないように思われるが、次末音節にストレスを持つ10語のうち6語 (цейх’гауз /cejx’gauz/ 「兵器庫」等) はドイツ語 ‘haus’ からの借用語を後部要素に持つ複合語で、原語における二重母音に対応する母音連続 /au/ のうちの /a/ を持つ音節にストレスを持つものであり、他の3語 (на’ктоуз /na’ktouz/ 「羅針儀箱」等) も原語の二重母音に対応する母音連続のうちの左の母音を持つ音節にストレスを持つものであるため、別の要因が考えられる。前次末音節にストレスを持つ1語 (экзер’циргаз /ekzer’cirgauz/ 「屋内練兵場」) も借用の複合語であり、そのまま単純語と同様に考えるわけにはいかない。したがって、原語の二重母音に対応する母音連続を持つ語や複合語を別にすれば、例外はСуперанская (1968: 240) が挙げた1語 (‘камбуз’ /kambuz/ 「船の厨房」) のみとなり、この範囲で語末音節がストレスを持つ割合は96.43% である。これらは2.2節で見たように共通した意味

を持たないさまざまな原語からの借用語であり、類推が意味的な分類や原語の枠を超えて働いている可能性を示すが、借用元も想定できず意味も不明な無意味語においてその類推が働くのかどうかを調べる。

こうした観点からの分析結果を表13に示す。この表は子音で終わる3音節調査語を語末要素別に分けてストレス位置が置かれた割合を示したものである。これを見ると、前述の3つの語末要素を持つ無意味語が語末音節にストレスを置かれる割合は、借用語の場合と比べても固有語を含めた場合と比べても低いことがわかる。語末要素が前述の3つのもの以外の子音で終わる3音節調査語と比べても、-аж /až/ 以外はむしろ低くなっており、借用元の影響も意味の影響も排除した無意味語においてはこれらの語末要素がストレスを呼び寄せるとは言えず、これらの語末要素を持つ借用語が語末にストレスを持つのはやはり原語や意味の影響によるものであろうと考えられる。

表13：子音で終わる3音節調査語の語末要素によるストレス位置の割合

	調査語数	I	II	III
-аж /až/	4 語	<u>81.71%</u>	12.70%	7.72%
-ит /it/	4 語	<u>74.25%</u>	23.69%	5.58%
-уз /uz/	3 語	<u>62.04%</u>	30.56%	9.26%
その他	3 語	76.72%	18.60%	5.61%

5. 結論

本稿では、ロシア語において形態素ごとにアクセントに関する特性を持っている固有語や原語の影響が無視できない借用語を離れ、参照すべきアクセントの特性も原語も意味も持たない調査語によって、ロシア語の名詞アクセントのデフォルトについての手がかりを得るべく調査を行った。調査語数が多くはないため、これだけですべてを明らかにすることは望むべくもないが、今回の調査から次のような結果を見出した。

- (7) a) 語末が子音である場合は語末音節、語末が母音である場合には次末音節にストレスが置かれることが多い。
- b) 音節の重さはストレス位置に影響を与えない。
- c) 語幹において、広母音あるいは /o/ を持つ音節は狭母音を持つ音節に比べてストレスが置かれることが多い場合がある。
- d) 音節頭子音の有無と数はストレス位置に影響を与えない。

- e) 既存の語において偏ったストレス位置の分布を示す語末要素が無意味語においてもその偏りを示すとは言えない。

このうち、a) は (6) で述べたように語幹末のストレス位置がデフォルトであると言える可能性がある。しかし、(7a) と (6) のどちらの記述が妥当であるかは、借用語の場合にそうであるように、語末の母音が必ず屈折語尾になるとは言えない場合があるため、屈折させるかどうかを調べた上で結論を出さなければならない。ちなみに、Суперанская (1968: 254) が調べた借用語では母音で終わる屈折しない語が280語あり、その語末の母音を含む音節がストレスを持つ語が134語、次末音節がストレスを持つ語が113語、前次末音節が16語、語末音節と次末音節の間でゆれを示す語が15語、次末音節と前次末音節そして語末音節と前次末音節との間でゆれを示す語がそれぞれ1語あり、母音で終わり屈折しない語で語末音節（つまり母音で終わる語幹末音節）にストレスが置かれる割合が比較的高いことから、少なくとも借用語では (6) の記述を支持する傾向があるといえそうである。(6) のように言えるとすれば、2.1節で見た固有語の自己アクセント特性を持つ語根と同じ傾向であると言え、興味深いところである。

(7c) については、他の母音を含めた更なる調査が必要であるが、Булаховский (1954: 188) が19世紀前半のアクセントのゆれに関して「i, u から先行するa, e, o へのストレスの移動はロシア語の純粋に音声学的な傾向である」と述べていることから、母音の位置関係についても今後さらに綿密に調査を行いたい。

ロシア語が「完全な自由アクセント言語」だとしても何らかのアクセントの規則性を示すことを確実に示すためには、今後、上記の問題に加えて、既存のより新しい借用語におけるストレスの傾向や現在生じているストレス位置のゆれについて調査し、今回の調査結果と照らし合わせて同様の傾向が見られるかどうかを確かめていく必要がある。

注

- 1 ただし、派生接尾辞の中には、それより前の形態素の強弱にかかわらずストレス位置を優先的に決定するようになったものもあるし、語根を複数持つ複合語には必ずしもこの原則は当てはまらない。また、類推などによりストレス位置が変化したものもあるし、現在ゆれを示していて変化の途上にあると思われる語も少なくない。
- 2 以下、音韻表記と語義の日本語訳は筆者により、訳は現代ロシア語における意味に対応する。音韻表記はストレスによる母音の変化や位置による子音の有声/無声の交替を無視し、形態音韻論的表記を用いている。
- 3 Суперанская (1968: 257) によれば、借用語で語末に -a /a/ または -я /ja/ を持ち屈折する語が1110語、語末に -a /a/ を持ち屈折しない語が12語あり、-и /i/ で終わる52語はすべて屈折しない（ただし通常-и /i/ で終わるPluralia tantum 64語と複数形でよく用いられる81語を除く）。

引用文献

- Булаховский, Л. А. (1954) *Русский литературный язык первой половины XIX века: фонетика, морфология, ударение, синтаксис*. Москва: Гос. учебно-педагогическое изд-во Министерства просвещения РСФСР.
- Зализняк, А. А. (1985) *От праславянской акцентуации к русской*. Москва: Наука.
- Суперанская, А. В. (1968) *Ударение в заимствованных словах в современном русском языке*. Москва: Наука.
- Шевелева, М. С. и др. (ред.) (1974) *Обратный словарь русского языка*. Москва: Советская Энциклопедия.
- Ando, T. (2006) Derivational Mobile Accent of Feminine Nouns in Russian. *Phonological Studies* 9, ed. by the Phonological Society of Japan. Tokyo: Kaitakusha.
- Garde, P. (1976) *Histoire de l'accentuation slave* 1. Paris: Institut d'Études Slaves.
- 窪菌晴夫 (2006) 『アクセントの法則』 岩波書店

付記

本稿は、平成20年度科学研究費補助金若手研究 (B) 「ロシア語名詞アクセントの動態と借用語の影響に関する研究」(課題番号19720094) による研究成果の一部である。

表 14

	単語	音節数	o位置	重音節	末尾	重頭子音	単一回答				複数回答			
							I	II	III	IV	I & II	II & III	I & IV	II & IV
1	puram	2		I	am		35	0				0		
2	gisana	3			a		3	32	1		0	0		
3	kantis	2		I, II	is		7	29			0			
4	murkiga	3		III	a		4	29	3		0	0		
5	purajma	3		II	a		3	31	1		0	0		
6	gosana	3	III		a		0	36	0		0	0		
7	katosa	3	II		a		0	33	2		0	1		
8	mukigo	3	I		o		3	29	4		0	0		
9	tustrama	3			a	II	6	27	2		1	0		
10	strupoma	3	II		a	III	0	34	2		0	0		
11	gosanda	3	III	II	a		1	33	1		0	1		
12	gisanip	3		I	ip		24	10	2		0	0		
13	katisuna	4			a		0	34	1	0	0	1	0	0
14	puirama	4			a		0	35	1	0	0	0	0	0
15	gisanzuz	3		I	uz		18	14	3		1	0		
16	katisazh	3		I	azh		27	4	4		0	1		
17	mikarit	3		I	it		23	8	4		1	0		
18	gisanz	2		I	anz		34	2			0			
19	katisa	3		I	a		4	30	2		0	0		
20	murkig	2		I, II	ig		15	21			0			
21	pujrama	3		III	a		3	32	1		0	0		
22	gisanda	3		II	a		2	34	0		0	0		
23	kotisa	3	III		a		3	32	1		0	0		
24	mukoga	3	II		a		4	31	1		0	0		
25	puramo	3	I		o		4	31	1		0	0		
26	tostrama	3	III		a	II	7	27	1		0	0		
27	strupujma	3		II	a	III	3	31	1		0	0		
28	galsudja	3	II	III	a		0	35	0		0	0		
29	katisun	3		I	un		30	3	2		0	0		
30	puramila	4			a		2	29	2	0	0	1	0	1
31	paruima	4			a		2	30	2	1	0	1	0	0
32	katisuz	3		I	uz		25	5	6		0	0		
33	mikarazh	3		I	azh		28	3	3		1	0		
34	puramit	3		I	it		30	2	1		2	0		
35	paraumi	4			i		1	30	3	1	0	1	0	0
36	katis	2		I	is		15	20			1			
37	mukiga	3			a		4	30	2		0	0		
38	pujram	2		I, II	am		36	0			0	0		
39	gilsana	3		III	a		4	30	2		0	0		
40	katilsa	3		II	a		4	31	1		0	0		
41	mokiga	3	III		a		2	28	6		0	0		
42	puroma	3	II		a		5	31	0		0	0		
43	gisano	3	I		o		0	34	2		0	0		
44	tujstrama	3		III	a	II	3	32	1		0	0		
45	puramil	3		I	il		27	6	2		1	0		
46	paurama	4			a		0	35	0	1	0	0	0	0
47	puramazh	3		I	azh		28	5	1		1	0		
48	gisanit	3		I	it		27	7	1		1	0		
49	mukig	2		I	ig		20	15			1			
50	purama	3			a		7	28	1		0	0		
51	gilsanz	2		I, II	anz		35	1			0			
52	katisa	3		III	a		1	33	2		0	0		
53	mukirga	3		II	a		5	31	0		0	0		
54	porama	3	III		a		3	29	4		0	0		
55	gisana	3	II		a		1	34	1		0	0		
56	katiso	3	I		o		3	27	4		2	0		
57	strupuma	3			a	II	3	32	1		0	0		
58	gisanita	4			a		1	32	2	1	0	0	0	0
59	pairuma	4			a		2	34	0	0	0	0	0	0
60	gisanzh	3		I	azh		31	3	2		0	0		
61	puramuz	3		I	uz		22	12	1		1	0		
62	paraimi	4			i		2	28	5	0	0	1	0	0
63	katisit	3		I	it		21	12	2		1	0		

ロシア語母語話者に対する無意味語アクセント調査

無回答	有効回答	含・複数回答				I~IV/有効回答×100			
		I	II	III	IV	I	II	III	IV
1	35	35	0			100.00%	0.00%		
0	36	3	32	1		8.33%	88.89%	2.78%	
0	36	7	29			19.44%	80.56%		
0	36	4	29	3		11.11%	80.56%	8.33%	
1	35	3	31	1		8.57%	88.57%	2.86%	
0	36	0	36	0		0.00%	100.00%	0.00%	
0	36	0	34	3		0.00%	94.44%	8.33%	
0	36	3	29	4		8.33%	80.56%	11.11%	
0	36	7	28	2		19.44%	77.78%	5.56%	
0	36	0	34	2		0.00%	94.44%	5.56%	
0	36	1	34	2		2.78%	94.44%	5.56%	
0	36	24	10	2		66.67%	27.78%	5.56%	
0	36	0	35	2	0	0.00%	97.22%	5.56%	0.00%
0	36	0	35	1	0	0.00%	97.22%	2.78%	0.00%
0	36	19	15	3		52.78%	41.67%	8.33%	
0	36	27	5	5		75.00%	13.89%	13.89%	
0	36	24	9	4		66.67%	25.00%	11.11%	
0	36	34	2			94.44%	5.56%		
0	36	4	30	2		11.11%	83.33%	5.56%	
0	36	15	21			41.67%	58.33%		
0	36	3	32	1		8.33%	88.89%	2.78%	
0	36	2	34	0		5.56%	94.44%	0.00%	
0	36	3	32	1		8.33%	88.89%	2.78%	
0	36	4	31	1		11.11%	86.11%	2.78%	
0	36	4	31	1		11.11%	86.11%	2.78%	
1	35	7	27	1		20.00%	77.14%	2.86%	
1	35	3	31	1		8.57%	88.57%	2.86%	
1	35	0	35	0		0.00%	100.00%	0.00%	
1	35	30	3	2		85.71%	8.57%	5.71%	
1	35	2	31	3	1	5.71%	88.57%	8.57%	2.86%
0	36	2	31	3	1	5.56%	86.11%	8.33%	2.78%
0	36	25	5	6		69.44%	13.89%	16.67%	
1	35	29	4	3		82.86%	11.43%	8.57%	
1	35	32	4	1		91.43%	11.43%	2.86%	
0	36	1	31	4	1	2.78%	86.11%	11.11%	2.78%
0	36	16	21			44.44%	58.33%		
0	36	4	30	2		11.11%	83.33%	5.56%	
0	36	36	0			100.00%	0.00%		
0	36	4	30	2		11.11%	83.33%	5.56%	
0	36	4	31	1		11.11%	86.11%	2.78%	
0	36	2	28	6		5.56%	77.78%	16.67%	
0	36	5	31	0		13.89%	86.11%	0.00%	
0	36	0	34	2		0.00%	94.44%	5.56%	
0	36	3	32	1		8.33%	88.89%	2.78%	
0	36	28	7	2		77.78%	19.44%	5.56%	
0	36	0	35	0	1	0.00%	97.22%	0.00%	2.78%
1	35	29	6	1		82.86%	17.14%	2.86%	
0	36	28	8	1		77.78%	22.22%	2.78%	
0	36	21	16			58.33%	44.44%		
0	36	7	28	1		19.44%	77.78%	2.78%	
0	36	35	1			97.22%	2.78%		
0	36	1	33	2		2.78%	91.67%	5.56%	
0	36	5	31	0		13.89%	86.11%	0.00%	
0	36	3	29	4		8.33%	80.56%	11.11%	
0	36	1	34	1		2.78%	94.44%	2.78%	
0	36	5	29	4		13.89%	80.56%	11.11%	
0	36	3	32	1		8.33%	88.89%	2.78%	
0	36	1	32	2	1	2.78%	88.89%	5.56%	2.78%
0	36	2	34	0	0	5.56%	94.44%	0.00%	0.00%
0	36	31	3	2		86.11%	8.33%	5.56%	
0	36	23	13	1		63.89%	36.11%	2.78%	
0	36	2	29	6	0	5.56%	80.56%	16.67%	0.00%
0	36	22	13	2		61.11%	36.11%	5.56%	

※この表においては、単語を音韻表記しているが、本文中のzはzhに置き換えてある。

o位置：/o/を含む音節の位置
 末尾：語末要素
 重頭子音：3子音から成る頭子音を持つ音節の位置

